**ぶどう園に行こう 2017 10 01**

**マタイ 21:23-32 牧師　安達均**

主の恵みと平安が皆様の心に豊かに注がれますように!

私が医療機器の会社に勤めていたとき、同僚の一人で大切な開発技術者ががんとの診断を受けて、余命が一年は無いだろうとも言われ、20年近くが経過する。彼がその診断を受けた日、私にそのことを打ち明けてくれた。

私は最初は何も言葉は出なかった。しかし、一人のキリスト教を信仰する者として話せたことというか、質問したのだが、「救い主イエスについて話してもよいですか？」　ということだった。しかし、すぐに返答があり、「結構です。」と言われ、自分の母親は、台湾の宗教指導者で、家の宗教があるから。とのことだった。

すぐにキリスト教の話はもうしまいと心に決めた。彼は入退院を繰り返す生活に入っていき、私は家や病院にお見舞いに出かけていった。彼のやりかけの仕事の話もする必要があったが、それ以外に、彼がどんなふうに考えたり、どんな気持ちでいるかの話も聞いた。

すると、3ヶ月ほど経たときだった。　彼の方から「安達さん、神様の話がしたいです。」と打ち明けられ、それは、もちろん救い主イエスのことだった。　彼は３ヶ月前の神の（私を通しての）呼びかけについて、考え直し、そして、呼びかけに応じてくれたのだ。この私の友人についての話は、また、メッセージの後半で触れたい。

本日与えられている福音書箇所の大きなポイントは、父が「今日、ぶどう園に行って働きなさい」と呼びかけた二人の息子のうちの、兄の方が、一度は「いいえ、私はいきません」と断ったのに、考え直して、父の勧告通り、ぶどう園に向かったことだと思う。

これはあくまでたとえ話であり、父は神のこと。一度は「いきません」と言ったものの、考え直してぶどう園へと向かった兄とは、世間から罪深い人々と断定されてしまっていたものの、「すべての人に悔い改め」を呼びかけた洗礼者ヨハネに従った徴税人や娼婦たちのことを指していたのだと私は思う。

またぶどう園とは、イエスはよくぶどう園の話をしているが、神の支配する御国。またぶどう園なので、その御国で生まれるフルーツを育てるため労働者が働くところ。先週のイエスの話の中に、朝早く、そして9時ごろ、昼ごろ、3時ごろ、そして5時になっても、何時であろうが、また体が弱っていようが年を老いていようが無条件にぶどう園に招かれた労働者たちの話を思い出す。

父はどのような子供たちだろうが、自分の子供たちがぶどう園に行って、大切にされている喜びに気づいて欲しいという気持ちがあったのではないだろうか。そしてどんな境遇の人々であろうがだれでも御国に招かれている状態が思い浮かんでくる。ぶどう園は神の支配するところ、教会とも重なってくる。

では、この短いたとえ話の中で、弟とはだれのことを言っていたのだろうか。弟は「承知しました。」と答えたものの、ぶどう園にはいかなかった。それは、当時の世の中で、優等生であり神の言う律法は全部守っていると自負していたユダヤ教のリーダたちと思えてくる。

彼等は、神の派遣したヨハネのメッセージ「悔い改めなさい」との言葉は、ユダヤ教の指導者として、決して悪いものだとは思わなかったことだろう。しかし、自分たちはちゃんとした宗教指導者であり、自分たちが悔い改める立場にいるわけではないとして、ヨハネを通して語られた神の呼びかけには従わなかった。つまり本気で父なる神とともに生きようとしていなかったし、徴税人や娼婦たちを含めてすべての人々を愛するなどという気持ちにはなっていなかった。

さて、本日与えられたイエスのたとえ話は、現代を生きる私たちに何を語っているのだろうか。みなさんは、このたとえ話の中で兄だろうか、弟だろうか？　いろいろな気持ちが交錯してくるのではないだろうか？

ちなみに、冒頭で話した一度はキリスト教は結構ですと断ったが、後に神様の話を聞きたいと言った私の友人の話の続きをしたい。彼は、私や当時の高塚牧師とも話した。ただ彼と奥様の母国語は台湾語だったので、台湾語で伝道している教会に通いはじめた。そしてご夫婦で洗礼を受けた。

医師の最初の診断によれば1年未満の余命宣言があったが、彼は二年以上の日々を生きることができた。2001年の6月のペンテコステには亡くなったが、その2週間前、私にこんな話をしてくれた。「安達さん、がんになって、良いこともあったよ。家族の結びつき強まったし。」

さらに、彼はこの世の命は終わることは承知していたが、「僕は安達さんといっしょに伝道したいよ。」彼の言葉は、後に私が会社を辞し神学校に進み、牧師となる大きな一因となった。私は、1998年、彼ががんの診断を受けた当時、自分こそ教会に毎週通っていて、自分は4代目のキリスト教信者であることを自負していた。

なので、自分のほうこそ神に近い存在だと思っていた。しかし、そのころの彼と私の状況を振り返ると、本当に考え直してぶどう園に行き神とのまじわりに生きたのは彼の方だと思う。つまり、彼は兄で私は弟だったとふりかえっている。

そして与えられた聖書箇所の本日の説教者の一人の牧師として、今日みなさんに伝えたいことは、父なる神が語ってくださったことと同じことを申し上げたい。私はみなさんとぶどう園に行きいっしょに働きたい。

88年にさまざまなルター派教会がいっしょになり、アメリカ福音ルーテル教会ができた。97年から私はアメリカ福音ルーテル教会の一教会である復活ルーテル教会に来ている。

教会を取り巻く状況は、十分な神学教育を受けそして招聘されてアメリカ福音教会の牧師となる人数は、アメリカ福音ルーテル教会誕生のころより減る傾向が続いてきている。ほとんどの宗派で米国での教会で礼拝を守る人数も減っている。しかし、教会にくる人数は減っても、教会が社会に貢献する仕事は減らないどころか増えている。いま一度、同じことを申し上げたい。いっしょにぶどう園に行き、働こう。アーメン